

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	山岳部部報
Author(s)	
Citation	龍南, 191: 111-125
Issue date	1924-12-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8762
Right	

よう、が此意味で種馬の飼付手入れの加勢をなすことが、吾々には非常に有意義なことであつたのである。

尙又牧手の多くは騎兵出身であり、吾々が質問さへすれば、皆親切に教示して呉れたので、一同大ひに得るところがあつた。

× × ×

午後の耕作は大農法でやつてゐるので、随分大きな機械を使用してゐる。吾々が従事した仕事は、大豆の收穫牧草の刈取、田畑への肥料まきがその殆んどであつた。大豆は機械で刈り倒されたのが乾くを待つて、各自フォークで集めて山を造り、四百ノ束

にして厩舎の二階に運ぶのである。眞夏の黒石原の日中のことで炎熱には大分憚まれたが吾及び友の鐵色になり行く膚を大くなり行く腕を見る時溢れる様な力が湧き出たのである。

時まさに水瓜、トマトの期節で、飽く程これらの馳走にあづかつたのである。

× × ×

種馬所門前、耕作監督の楠氏方二階八疊六疊の二間に一同合宿として戴いたのである此部屋よりは東、大阿蘇の連山を西、金峯の

秀姿を眺め得、黎明、黄昏にこれらの山々に懸かる赤雲紫雲は如何に吾人に感歎の聲を呼ばしめたことだらう。

又讀書勉強に、或ひは座談に其余暇を遂つたことの樂しかりしことよ、或ひは又一日の勞働を終へて、強力くつき立つた老ボツラの下に銀河を仰いでの夕食の如何に美味なりしことよ、夜は又おちこちの叢にすだく虫の音に和して、堂に入つたT君の尺八

× × ×

MY君のヴァイオリン、NY君のマンドリン等の交響樂は一同を酔はしめその微妙なりズムの中に疲れた体を横たへて安らげき眠りについた。

× × ×

一同よく体に注意して働いたので一名も体を害ふた者がなかつたのは幸であつたそれとろか一同來た時より一層丈夫な体になつて歸つたのである。

尙所長よりは過分の賞典を戴きて恐縮した次第である又來年も同志を募つて來れとの言葉を受けて種馬所を辭した。

終りに所長を始め係員一同の懇ろな指導を謝し記念のためなつかしき同志の名を掲て筆を擱く。

文科三甲 庭田君 一甲 山川君

一甲 松尾君

理科三甲 山田君 二乙 田中君

二乙 園田君 一甲 篠井君

——十三年十月——

山岳部 部報

第一班 五家莊行 (一)

班員、吉田道人。有勳俊勝。松尾清次。

この記を録するに當り先づ便宜上計畫された予定も前提して初めやう。尤もこの予定は第一日の阿蘇登山にあの四月一日の大嵐の爲めにもろくも破壊された。

第一日 熊本出發、阿蘇登山、高森附近にて一泊、

第二日、高森より馬見原まで

第三、第四、第五日、馬見原より、日向

まで、

第六日、五家莊

第七日、五家莊より熊本、

阿蘇で遭難したあの大嵐は六回の登山の中

でも初めての経験であつた。その上一週間の食糧、防寒具、天幕等をつめた吾等のリュックサックは困難を激増せずには居なかつた。それこそ九死に一生の態で頂上を見極めはしたもののあゝ嵐、あの砂風に當てられてはどちらを向くことも出来ぬ。もと來た道を引返すより仕方がなかつた。また坊中驛に着いてバツタリ横に伏した時は吾等の元氣は沮喪してしまつて居た。阿蘇越ゑを思ひ止めて三里木まで乗車し下りて農家の前にキャンプを張り翌日雨をおかして木山へ着いた。

元氣をとりなほして木山を出たのが四日の午前五時、御船に向つた。愈ゝ五家莊行の第一歩は踏まれた。春淺きあしたの冷氣を身に覺つ、田舎道をたどる。吾等の中には熊本を立つ時の希望そのものが燃ゑつてゐた。舟の山の麓を御船へ……………。

麓村此處はよあけに早ざくら

熊本を立つ頃はまだ櫻にはよほど早いと思つたのに此處ではもう殆んど満開である。御船鐵道の中で他の五家行きの五高生とそのコースを語り合ふ。甲佐驛に着けば何時の間にか見失つてしまつた。それより原町

までは型の如く……………。原町を過ぎた吾等は谷川づたひに爪さき上りを行く。

『五家行きですな。おひどかな——アタ、そぎやん荷物ばかりうて。今日はまあ二本杉までじやううなあ』

道づれが話してくれる。何時の間にか可成急な坂道を登つてゐる。あくまで谷川は横を流れてゐる。

見上ぐれば杉をならべて山逼る。

奇麗に植林された杉山、青肌あらはなる奇岩。皆吾等を祝福してくれる。道の傍にはれざらふべき岩清水が美しくかすかに音たつてゐる。

岩清水流れに一つ赤實かな。

愈峠にさしかゝる。春の日のものうさはひしひしと迫りゆく山路に逼る。

ひるさかり峠一里なもの言はず

實際もの言ふ義理ぢやない。岩かげに憩ふ吾等の前をまき負ふて過ぎ行く二人の山乙女のあとは犬の子一匹通らない。

桐の實の上下にゆるゝ峠かな

紺べきの春の空に桐の實が淋しくカラ／＼と鳴つてゐる。峰から峰を下す五家産の板が時々峠の静寂を破る。愈ゝ。道がけはし

くなつた。誰かが弱音を吹き出した。一人に弱音を吹かれて見ると他の者は何だか責任がある様な氣がして何だか無茶に元氣づく。それでもきついのは御話しにならない行き何がらもうそろ／＼キヤムプの場所の撰定をしてゐる。山を越ねれば山が出て來る向ふから馬の脊に板をのせたお爺さんか下つて來た。二本杉まで道程を聞くと七合だといふ。吾々はびつくりした。もう二里も來たと思はれるのにまた三合か。それでも仕方がなしに体をふつて足をひきづつて行く。わちが幾度なく駄目になる。

それこそほんとに蘇生の思ひで勝手にきめてしまつた二本杉が見ゆる所まで來ると山坂は稍緩かになつてゐる。暮れ易い高原の日は杉の木々を縫ふてかすかに最後の山の畫を描いてゐた。勝手にきめた二本杉も近まつて見れば成程ほんものの二本杉だつた。愈ゝ腰を据ゑてキヤムプの場所撰定にとりかゝる。初めて味はふべきキヤムプの一夜を前にしてこれまでの艱難も今は勝利者の宇頂天にさしそはてくれる一つの要素である。房々と茂りに茂つた五十疊位の芝生は絶好のキャンプ地であらねばならぬ。東に

はかすかに露はれた残雪を頂いた遠山に向ひ、西は重り合つた下々の山々を臨んでキヤンプは超然たる大自然に包まれた。各自持場をきめて夕飯の準備は出来る。江戸紫に暮れて行く遠山をバックに立ち登る我々の煙は詩か！

× × × × ×

あまりの寒さに半ばねむり半ば覺めて苦しい一夜を明した翌朝我々のまはりは驚くべき霜である。熊手で踏みけして來た霜をも一度ふみ直しつゝ、薪を集める。

今一度深山に霜をふみにけり。

薪切る音にあげゆく山の春。

永い時間を費やし朝飯をすまして此處を立つたのは十時近くであつた、今日の行程の短いのも我々をアイトルにした理由だつた一人一人笑釋を振舞ふて行く馬曳いた山男たちに前後しながら朝のうちにと道を急ぐ珍らしい木車が三人の旅人を慰める。純白の石灰岩を底に敷きつめた谷川の水が此の世のものと思へぬ程美しい。谷にせまる山々は紅葉の木で埋つゝある。

楓木の春にゆかしや五家の谷。

實際秋の景色が偲はれる。路傍に下る偉大

なつらゝも亦一つのなぐさみである。はかどらぬ路をたどりながらいたづらと休息は決しておしまぬ。

豫想の割りに俗化してゐる五家の里も小松重盛の神社を見出した時又何とも言へぬなつかさを見出した。ほらあなの中に重盛を祭つてある。

少しゆくと大きな製材所があつた。紀伊の人がやつてゐるとか其處でひるめしを焚いてもらう。今まで通つて來た五家の莊の印象はこの澤山の板で忽ちぶちこはされた木車の道はもう此處で終りになつてゐる。

これからは何處でも見る様な平凡な谷間の路を歩いた。人通りが少いだけが違ふ。暖い春の午後の路は存外はかどらぬ霞たなびく谷間からそゝりたつ杉の木の間を抜けると急に眼界が開けた。路は川まで下つてゐる。うれりうれつて川の岸まで來ると此處は又存外の別天地。山の奥の部落のやうな氣がする。開けば下屋敷といふ處ださうだ僅か數個の家ながら各々皆門構になつてゐたのには何となく昔しのびされた。

川を渡ると胸をつく様な急阪になつてゐる半里位だと人は言ふが歩いて見るとどうし

て、漸く一時間半の後登りがなくなつたあとは上つたり下つたりの平凡な路。併しあたりの景色にはなんとなぐ心をひかされた。日はもう落ちてしまつた。空は曇つたのが薄暗くなつてひや／＼する。漸く櫓水といふ所に來て農家の杉の木の中にキヤンプをさせて貰ふ杉の木が枯れたのがたくさんあつたので焚火はすぐに出來た。農家の人が珍らしいげに見物に來る食後農家に話しなしに行き色々珍らしい話を聞いた。五家莊も平家ばかりでなく管家の子孫も居るといふことも話してくれた。今は庄屋は二軒しかないが昔は五軒あつとも話してくれた。山の生活も面白く話してくれた。十時半頃天幕に歸る。

× × × × ×

パラ／＼と天幕にかゝる雨の音にふと氣が付いて目を開いて見るとまた暗い。マツチで時計を見ると四時半だ。皆を起しておいて外に出ると雨が降つてゐる嫌な雨だと思つたが仕方なしそのまゝ、急いで火を起す。まだ濕つては居なかつたのですぐ燃へ上つた。六時朝食を済してから荷物を作り何もかも済んで荷物を背負うて農家に禮に行く

米が二升許り餘つてゐるので大部置いて行く積りだ。理由を説明して米を差出したがいつかな受取らうとは思はない。とうとう買ふからとて金銭を出されたが受取りもせずそのまゝ、禮を言つて米だけ置いて來た。

一時間半ばかり雨の中を谷間から出て山に登つて行く霧を眺めながら歩いた。雨は何處から降るのかわからぬ様に風と一緒になつて吾々を苦しめる。

吹き捲くる吹き上ぐる降る山の雨

漸く小原に着いた。こゝから又三里は山道だ大半は上りだといはれる。暫らく休んで杉の間をゆつくり上り出す。路はどこまでも川に沿てゐる。雨が降つてゐなければどの位愉快だらうかと思はれた。一時間半も歩いてまだ上りだ川は少しも小さくならない。皆落膽して休んでしまふ。

どこまでと友に問はれし峠かな。

又暫く行くと行手に大きな瀧が見えた。急に勇みたつが中々そば迄行けぬ。世分も歩いて漸く傍まで行つた。可成り大きくりつばなものだ。暫く休んでしまふ。瀧の上を路は過ぎて行く。川は漸く小さくなつた。もう峠の頂上は近いと勇みたつ。路が川か

ら離れてゐると無情に嬉しかった。併しそれはぬか喜び。すぐ又川に沿つてしまふ。ぬか喜びが二三度の後川とは全く別れて急な登りになつた。もう其處だと許り登つてしまふ。果して頂上に出た。柿迫村の方は霧に包まれて何も見になかつた。雨の頂上で一休みして下りにかゝる。路は雨の爲に滑つて仕様がな。下るに随つて路の兩側に松の木が多くなる。

霧に出て霧にかくる、路の松。

時々霧が破れて峯の松が見ゆるのも美しかった。柿迫村の岩奥がそれでも十二時だった。足はこれから何里か下ると馬車があると言はれて喜ぶ程だった。

馬車ありと聞いて喜ぶ疲れかな。

岩奥からは氷川端の道を疲れ足を引きずり／＼十一里を歩いて夜九時鏡町に着き疲れだ足を横にする事が出来た。(松尾)

第一班 五箇莊めぐり (二)

(三月十一日より十四日まで)

班員 近藤 精 中村 誠治

第一日。午前六時春竹發、八時甲佐着。昨

夜怪しかった黒雲は少しのあとかたもな今日ばかりと晴れた日本晴。この數日日續きて原町への街道は坦々として、内大臣山の何にかで、それに向ふ自動車、後から幾臺とはなく追ひ付いては、塵埃をひひつけて行く、十時頃には原町も過ぎ、いよいよ山路にさしかゝつた。山路になれば山路の特長、いつの昔降つた雨のためにか泥鰌でも居りさうな水溜、それこれする中に早稲あたりを過ぎ、今日大難關二本杉の峠にさしかゝれば、徑は羊腸とでもいふ形で、うねりくねり、その上馬鹿らしい急斜、それでも元氣旺盛といふ所で中腹まで登れば殘雪山膚を被ひ、鹿子斑の景が我等の意氣を一入盛にした。山からは牛のつらとのんきさうな顔がいくつともなく過ぎて行く。而も丁寧に我々に挨拶を交して行く。頂の二本杉の天をつくやうな雄姿を仰ぎ見た時はつと一息した。これから下る一方、山中に入れば日は山々に遮ぎられ早くも光をうすめ初めた。こゝで日が暮て了つてはそれこそ大變。食糧はともあれ寢具はなし、雪がふりそうな寒さ、大いに、道を急ぎ、夕暮のもやがちらつく時分、山谷深く、全く

浮世を外にした、二十二三月の部落葉木の平に着き、とある一戸に至り、一夜の宿を乞へば許され、腰のまがつた主人の翁と晩くまで爐をかこみて談ず、このあたりの山々には今でも野獸が居るといふ、何んでも昨日数年振で鹿が飛び出したさうた、この村には何百年といふ家が大部分あるさうな、第二日、昨日の疲れですつかり朝寝してつて七時起床。空は昨日と打つて變つて鉛色のべたやうな曇天。この村を圍む山々の輪郭もはつきりせず、今にも雨か雪が降り出しさうな模様、宿の人に天氣をとへば降りますと言ふ。困つたとは思つたか急ひで今日の旅程の準備をし禮して發足す。空はます／＼惡化し路の兩側の木々は頭をおさへつけさう。道の半町も行かぬうちに雪がちらつき初め、忽ちに吹雪が強顔と、いはす、どこといはず吹つけマントの頭巾は雪で眞白になり、そのうちには雪は雨をまど、昔はこゝらへんの村落の庄屋さんだとかいふ家のある古屋敷邊に來た時分はすつかりどしやぶりに近い雨となり球磨川の上流の一だといふ潺湲たる流れを脚下に見下し小金峰の山路を登れば雨のため道は悪く

なるし、伐り倒したる木材路を遮り霧は連山の姿を隠し谷底をうづめ心をひき立てる景もなければ、ともすれば意氣沮喪せんとする、二人は黙々として急げども路は思ふやうにはかどらず二時頃になれば、雨ます／＼強く、二人を除ひては全く往來する影もない。椎原と久連子まで行くは難く、仁田尾の小原に今夜の宿をとることにし、區長さんの門をたゞけば區長さん自ら出られ五高のものだと聞き大いに喜び、我々を好遇され、大いに恐縮す。區長さんの言ふには五高の先生方同伴で五六十人位來るだらうと思つて、村の者に言つて置きましたには益々恐縮す、小原は十九戸ばかりの小村落で村の者は木材を伐り出すのがその仕事で、水田なんては全くなく山の斜面の木々を焼き拂ひ、そのあとに粟や小豆馬鈴薯等を作り、これらのものがその常食として居るといふ。五箇莊全部の生活は皆こんなものださうで、平家落武者の人々だと云ふがその當時から傳つた鎧兜刀槍の類の保存せる家全く少なく然し椎原のとある家には、具足一領あつたさうだが、數年前の火災で消失して了つたといふて區長さん大分惜つ

て居た。また特別に傳説などもあまりないらしい、一昨日は陸軍記念日で五箇莊の豫備後備の人々がこゝに來て、昨日まで賑つて區長さん大分忙しかつたと云ふ、昨日二人が世話になつた家の人もこゝで一泊して戻つたさうな、縁に立ちて外を見れば三時頃より降り初めた、綿をちぎつたやうな雪が絶間なく降りしきり四圍の山々いつしか眞白となり、目のあたりの藁屋も白帽をかぶり、この別世界の雪の風情はなんとと言へぬ感じを與へるのであつた。床に就けば二日分の疲れでぐつすり寝込んで了つた。第三日、昨夜の雪もすつかり霽れて、空は澄み切つたやうな碧色、山々の肌は殘雪淡く、きら／＼と輝き、山鄙の靜寂なこの小原の景名狀すべからず、區長さんの家を七時頃辭して久連子に向ふ。小原より半町の所に至れば谷間を洗ふ潺湲たる清流あり、椎原に至るため、昔はこゝに藁の釣橋ありたるも今はわづかにそのあとを残すのみにして、立派な板橋となつて了つた。椎原に至れば、その戸數小原あたりよりも少なく實に山間の一僻地であり、これを過ぐれば道漸く險にして歩行自由ならず。然れども

天氣快晴にして冷風軟かに、爽々たる氣全身に溢れ、け意氣損ぜられることなれば、久連子もいつの間にがすぎ、さきの清流の岸邊に至る水はあくまで清澄にして、見るからに心地よし。日はますます／＼暖く、殘雪は全くこれを見る能はず。道は山路なれども漸くよくなり、前と異り歩行思ひの外掛り宮園に至れば道良好にして荷車なも通ふほどなれば漸くにして五箇の山地を脱した、元氣盛んにして頭地に泊る豫定の所越して田代に至りこゝに一泊す。

第四日、六時起床、人吉に向つて出發、天氣よければ歩行するによく、人吉より乗車す、こゝに全く五箇莊めぐりも終へたが遺憾とするは旅程の都合上葉木、仁田尾、椎葉原、久連子、樅木、の中、樅木を巡らなかつたことである、途中白石により五時頃着熊 (中村)

第一班 五家莊踏破 (三)

理三甲一 清成 迪
文三甲二 大即 英隆
文三甲一 林 茂

四月四日 熊本春竹驛——甲佐着——佐侯

目磨——小田尾——釋伽院(五里)
五日 釋伽院——木場——深山——岩奥
笹越——下屋敷——小原——

椎原(八里)

六日 椎原——上荒地——八重——平野
頭地——野口脇——田代——平野

免田驛——人吉——熊本(十六里)

釋伽院行はさした困難もなく三里許りの山路をうろついて居れば平氣で古ぼけた二千年昔の山寺に辿り着く。不動妙王。嚴密心身の瀧(瀧ではなく岳の意。一町許りの間左右絶壁、宛然一本橋を渡るが如し)等見物。寺内に一泊。小僧良専こと、床下や樓門にこの頃毎日狐がやつて來ると云ふ。五日前八時釋伽院出發天氣晴朗。岩奥にて一憩。笹越は五家莊に入る關所。一里許りの行程にて六百米以上登るから少しの覺悟が必要である。絶頂一〇〇六米。想像ほどではない。金峰位のものである。此より球磨川の一支流となる谷川にぞふ。二里も下れば有名な梓壇轟瀧を左に見る。長さ百間の長布。カメラは此の附近より顔を表はす谷に添ひ路に従ひ山を辿るにつれシャツタの開閉自在なり。下屋敷に一家がある。

左坐と云ふ昔の平家の莊。此所にしばらく休憩。小原まで一里。こゝの小學校に誰も一泊を乞ふので丁度校長兼教頭の唯一人の先生が熊本行をされて居たので椎原まで止むなく、急坂一里を上下する。此のあたり全く五家莊である。其特徴を充分味ふことが出来る。椎原の坂田万次郎氏方に一泊を乞ふ。悦んで應ぜらる。夕日は頭上の山端に既に落つ。ただすり硝子の様な明るさで一ぱいである。鶯の聲しきりに、桃の花盛である。六日は雨、用意のマントをソユツクサツクの上におゝひ巡禮姿と化す。春雨に打たれ椎原から久連子にまはらず、最近青年の努力に成る間道をへて五木川に添ふ上荒地ではじめて家を見る。山路數里。下荒地から平野をへ西谷にて宮園に橋を渡るこゝより最近完成された自動車を通る様な道路となり既に五家莊を去つたことに氣付く。椎原から八里にて頭地に着く。普通ならこゝで一泊だが元氣と忍耐とを以て、尙ほ八里免田驛まで走つた。草鞋を買ふこと十數度。マントは雨を含んで數貫。

(林)

大和アルプス大

台ヶ原踏破記

第二班 參加者

文三甲二 佐野福治郎
文二甲一 肥後 正樹
理一乙 谷 基 吉

第一日(七月十七日) 奈良——山上ヶ獄頂上、集合地奈良を六時頃發電車にて八時過吉野驛に着。吉野宮、村上義光墓、藏王堂等に詣で十時芳雲館に着、豫め依頼せる案内人中村國一氏に先導され十一時全館出發、彌々山にかゝる、途次南朝の遺跡を弔ひ十二時金峰神社前の茶店に小憩、女人限界の石標も過ぎ二時百丁茶屋に着、少し登れば既に植林なし原生林繁茂し驚なきなづり虹脚下に出没を極むるの美觀を呈す、五番石茶屋を経て蛇腹の險を過れば六甲の山々大阪灣を一時の中におさめ得らる、漸やく大和アルプス特有の「モヤ」に襲はれながら五時洞辻茶屋に着く。これより頂上の堂迄六十丁途中「油こぼし」「小鐘掛」「鐘掛」の險や、「東の覗」の行場や「お龜石」の怪等

存在す、六時半漸やく宿舍の喜藏院に入る溫度六十度、女人禁制なが故に本當の男世帯なり精進料理に腹をこしらへ湯に入り大蒲團にくるまり九時就寝、本日の行程八里

第二日(十八日) 山上ヶ獄——彌山行人堂、降雨を冒し七時過喜藏院を出て藏王權現の本堂に詣で一面モヤに包まれたるお花畑を見、小笹の宿を過ぎ龍ヶ嶽、腸の宿を經て阿彌陀が森より細道に入る、小普賢の中腹經坂石を探り雨中を進み十時大普賢頂上につく、國見嶽を右に見「サツマコロビ」の急阪を下り「稚兒泊り」に小憩、彌勒岳の峰傳ひに七曜嶽の斷崖を棧道つたひに登り雨晴れたるを幸ひ中食、降雨再びきり困りながら「行者還り」を過ぐ、この邊一帯郭公、驚、駒鳥多くよく我々を慰む、「一の多和」に小憩いくつかの小岳を経て「香走せの宿」に二時四十分着、本日の最後の山彌山の急阪「聖賢八丁」にかゝる、休むこと數度、三時二十五分頂上行人堂に入る。本日の行程六里半、案内人中村國一氏五十余回の登山中のレコードなりと、

第三日(十九日) 彌山——前鬼
昨日の兩名残りなく晴れ壯麗なる御來光を

拜むを得、七時五分出發唐檜の原生林を下り「大山蓮花」咲き亂る、關西の最高峰佛經嶽を極め明星岳を過ぎ「檢増童子」にて小憩青不動を下に眺め「金剛童子」を経て遙か「七面山」を見危險きわまりなき佛生岳の棧

道を傳ひ進み孔雀岳の中腹清水の畔にて中食、更に一時間にして「縁の鼻」の奇岩斷涯屹立の景を眺め休憩、「坐禪」「空杯」の險を過ぎ念佛橋を渡り「馬の脊」を越に「杖捨」を經て二時前釋迦嶽頂上に達す頂上に一小祠あるのみ、下ること二十分極樂東門を見氣持よき原生林を通り神仙に至る。ラジュームを含むと云はる香晶水を呑み連峰中最も男性的な大日嶽に鎖を傳ひ登る頂上四人を立たしむるに足らず過ぎにし山々を眺め得らる、大和アルプスはこれにて終りなればとて「武夫原頭」を高唱し「杖谷」の溪谷の岩塊磊々たる急坂を二里ばかり下り前鬼森本坊に六時過着す

明大出の若主人の好遇を受け安き眠りに入る、

第四日(二十日) 前鬼——裏行場、前鬼、河合身輕るになり約五十町の裏行場に至る。
分險しき絶壁を鎖で登り壯大無比の馬頭千

手不動の三瀑を見物引返し、中食を喫し十二時過森本坊を出て河合村へ強行し始め途中櫻峠を経櫻坂の急坂を下り一戸一村の成瀬を過ぎ前鬼口で小憩、これより縣道となり俗臭紛々河鹿の聲をきながら吊橋を渡り「古代」「白河」の村を過ぎ緩坂を上り六時五十分河合村の茶屋旅館に入る、山中としては随分便利なるなり美食をとり活力を養ひ電燈の下に眠る、

第五日(二十一日)河合村——大臺ヶ原山
昨日の強行が祟り歩調少々からず木和田を過ぎ一急坂を登れば早や羊腸なる緩坂のみ、踏破せし大和アルプスの比にあらず十二時過大臺ヶ原の入口に着く、原には豫想外に廣き清流三つあり越して「開拓」の平原を通り大臺ヶ原の名のふさわしきと思はせらる伐材のためのトロ道を通り「三河落山」「郷土塚山」を過ぎ二時半名古屋谷の大臺教會本部に入る、當山の開祖六十五才の古川嵩氏に迎はるる少憩後石道を牛石原、大蛇崑の勝を見る、途中は製紙原料のために巨大なる原生林が倒されてゐるを見れば甚惜しき心持す、五時半歸宿夕食入浴アセチレシの光の下に疲を休む(因みに當夜我が五

高生の外、四高六高も偶然宿泊せり)

第六日(二十二日)大臺ヶ原——柏木

覺め眺むれば大和アルプスの連峰靜かに横はる、一種の征服の感を抱かしむる、朝食後原中の最高峰日出ヶ嶽に至り展望臺より四顧すれば熊野灘の波大阪灣上の船舶四國淡路島等一幅の壯大なるパノラマをなす。實に天下を睥睨掌上に集むるの感あり歸宿十時本部を發し一里にして安心橋に達すそれより急坂を進み吉野河の原流沿ひて下る清流の畔にて中食屏風岩を過ぐるに至り漸く道平となり枋谷を過ぎ入波村に入り原始的な河原の溫泉を見る暫らくにして再び熊野街道に出づ一帶植林の美しさ限りなし、柏木の半里前に東洋一の稱ある不動齋菊の窟の鐘乳石石筍の美觀を見物六時四十分柏木の朝日館に投宿最後の夜としてその無事を喜び大ひに呑み又歌ひ相擁し踊り狂ふ

第七日(二十三日)柏木——奈良

惠れたる晴天が續く坦々たる眞白の縣道を進む井戸を通り丹生川上神社を経て十一時過大瀧にて中食、最後の山五社峠を越に十二時半宮瀧の對岸に着き一週間寢食を共にし世話になりし中村國一さんとお別れする

宮瀧より最初の吉野驛まで自動車で一目散漸やく二時幾分かの電車に間に合ひ四時に奈良着、紀念撮影をなし汚れたる体を洗ひ旅の疲れを休む。これにて全く豫定のコースを得たり (佐野)

第二班 市房方面

(白髮岳 登山記)

班員 淵田 正三

(三月十四日より十五日)

第一日 午後二時人吉出發。六時上村着。星子君の家に御厄介になる。

第二日 午前六時出發。七合目まで幅三尺位の道があると云ふ。村を出るとすぐ坂である。ただ上りに上るだけ。一里半位。六合目頃から殘雪がある。大木が自然に倒れて朽ちて居る。漸くたどり來た道も、あやしくなつた。加之谷へ下つて居るらしい。そこで道を捨てることにして、左へ上る。此所あたりから雪は一尺に近い。大木がしきりに朽ちたふれた上を越えて兎に角高い方へす、む二等三角點らしい所へ來た。此れから東南へ一里行かねば頂上へはつかない。未だ正午には随分間があるらしいので

安心して分け入る。ゆるやかな上り下り下だり竹の様な灌木にとげのあるのが茂つて居て中々進みにくい。それでもやがて、頂上らしい所へ来た。四方は簾であつて雪の中に標があり「X」である。山の高さは「30」米だと覺て居たので地圖をだして見ようとすると、地圖が無い。失つたのだ。正午らしくもあるので、其の標上に登山記念の札を置き飴を二つ三つ煩張つて下山。雪中の足跡が分らず、仕方なくらしい方へ下る。急坂ですべる、ころぶ。坂はどこまでも續いて小徑に出さうにもない。雪上に坐して煙草一服。乃ち急坂を左手になどつて山脊を越えて又すべる、ころぶ。ふと、先刻の小徑へ出る。どこをどうし來たものやら、ふりかへり見ると、朽ちた大木が依然靜かに横になつて居る。雪が乱れて居る。始めての登山がどうやらすんだのだ。煙草一服五合目で晝食一散にかけ下りる。上村着、三時半。昨夜しきりに止めた老父と星子君に、下山を告げて家へ向ふ。人吉着七時、

(淵田)

北日本アルプス登山記

第三班 石田 憲吾

第一日——少し汽車に酔つたのと、昨日から驛毎に出て居た暴風雨警報とで、重くなつた氣分を抱へて松本驛に下車する。そうしたことから、出發時の豫定を少し變へて、急に白馬岳へ向ふことにした大町迄輕鉄により、それからすぐ自動車を飛ばして傳説に富む青藍をたへた木崎、中綱、青木の諸湖の邊をつたつて四ツ谷に着いた。そこで無理に飯を三杯押込んで旅装を整へ、九時十五分に一人山へ向つた、一寸した不注意から細野で道を異へ、再び引返して、四ツ谷から一里の所にある二ノ俣小屋へ來た時は十一時になつて居た、そこから山道へさしかゝつた、少し急いで猿倉小屋へ來た時、自動車で一所だつた數名の客を追越す、その頃から段々疲が出て來た下界で見た空の雲は今身邊にある白馬尻小屋で少し休む何も食べられない、何うしても頂上の小屋迄行かなくてはと、それから直ぐ大雪

溪にさしかゝる雲の爲數間先は見えない、僕の様な瘦男には、三貫のリュツクザツクも脊中で支へられなくなつた、四五町も登つた頃もう少しも上れなくなつて、雪の上に腰を下し、ウキスキーを二杯飲み殆ど寒さも感じなくなつた体を滑らして、白馬尻の小屋に引返して宿ることにした

第二日——寒さに充分眠られはしなかつたものの、一日こうして休むと又制しきれぬ元氣が漲つてきた、午前五時又一人で雪溪をよちる、時々雨が申譯的におそつてくる二十丁近くの雪溪を登りつめると、繚亂たる百花の咲きみだれた慈平の御花畑に着く、獨りその天然の美を享樂しながら、小雪溪にさしかゝる、非常な傾斜をなして居て、一寸臆病風に吹かれて滑りでもしたら唯一の命も完全にとられさうだカンザキで踏しめて、二度そこを横斷し、岩石突兀たる急坂を雨にうたれながらよちる。そうして八時半に山頂の小屋に着いた。一人の客も居なくなつた小屋で、山男を相手に話をして居ると、急に戸の隙間が明るくなつた飛出して見ると、越後方面一帯に雲は全く切れて居る思はずカメラを手にして頂上へ

走つて上る、斷崖の肩に立ち、西北に緩く續く斜面が朝日岳の邊から急に落ちて黒部の峡谷となり、それをへだてて去年踏破した立山、及びそれに續く劍の諸峰、を指呼の間に見るその彼方に髣髴たる水天を、能登半島がすかに彩つて居る。南方に瞳を轉ずると、檜穗高を初め白山までがその勇姿を雲間に聳かして居る、この自然の前に唯一人跪くしげしの沈黙は、何んなに尊かつたことだらう小屋に歸つて食事なとりながら、山男から鍾温泉のことを聞き、旅程を急にかへた十時半、離山を越して杓子岳の腹をつたひ、足下から飛立つ雷鳥に驚かされなどして、鏝のお花畑につく葱平に比べて花の種類こそ少いが、その美しさは遠く彼の及ばない所である、鍾岳を越ゆる頃から再び雲に深くとざされて了つた、それから温泉へ下る急坂雪溪などをうやうやしくして這ひ下り、二時半に温泉につく再生の思をして、湯から上り、先着の法政の學生と一所に話す寢る前又湯に下りる。岩の間から湧出る湯を、堀つたばかりの地に流してあるだけで、湯の中で寝ころんで居ると空には破れた雲間から星が目瞬きして居る

雪の上を流れてくる冷い風が、靜に煩ななくては何處ともなく消へて行く……………

第三日——寒さに眠られず、午前三時頃から温泉に下りる雲を押破つて上る金環を湯の中に寝ころんで見るのも嬉しかつた小屋の赤毛布一枚で体を包んで邊を歩いて見る寒くなるそ又湯に入るそして心は遠く數万年前の原始時代に遊ぶ……温泉の湯で焚いた黄色い飯に舌鼓を打つて後、法政の學生と一所に歸ることにする雪溪を少し下り小日向山の傍を越ゆる猿倉に出て、約四時間を費して十二時に四ツ谷に着いたそこで下界の御馳走ライスカレーで腹をこしらへる午後二時に自動車で大町へ歸る、こゝは傳染病が流行して居る爲、白馬登山者にも非常な影響を及ぼした位なので、町も淋しく、こゝで宿をとる氣がしなかつたから、直ぐ四時過の汽車で有明へ行つた午後五時下車して中房温泉へ向ふ、有明温泉から山道にかゝる、陽は次第に山の端へ近づいて行く暗い森の木の間から脚下に白く砕けて流れる中房川を見下しながら、黙々として歩いて行く信濃坂を越へてからは提灯を手にし、別れ道へくると途中の茶屋で聞いた

馬の足跡のついて居る方へ行くべく、實をでも見つけるかの様にそれを探そんな事などして、九時半頃温泉の電燈を見出した時は非常に嬉しかつた、そして上り込むと直ぐ先づ第一に温泉に飛込む、

第四日——昨日の疲れを休める爲、今日は此處で靜かに泊る事にする、晝間の客は極少數なので、大變靜だ大きな温泉宿の中や、或は附近を散策しては湯に入る、夜は硝子窓を通してのそき込む月の光を眺めながら、床の中で美しい想像の翼を擴げたりなどする、川の流の音がかすかに聞えてくる、全く靜だ……

第五日——五時半に出發する、殆ど上りばかりの急坂である、一時間も行つた頃、同じく今朝早く出た諏訪高等女學校の生徒を追越した、それから又全く一人になる合戦澤小屋を過ぎて草木帯に出ると、渦巻く雲の間から富士が優しい姿を現す、八時前に燕小屋に着き、すぐ頂上に向ふ、飛驒方面はすっかり晴渡つて居て、男性的な槍の峰が空高く聳ね、それに續いて穂高或は鷲羽が咆號する獅子の様にきそひ時つて居る小屋で一寸休んで、九時半に出發する、燕

岳が次第に雲に被はれてくるにつれて、大天井の險崖が行手に立ふさがつて近づいてくる、蛙岩、爲右衛門吊岩なども何時過ぎたか判らぬうちに、岩壁にさしか、り大天井岳の頂上を極める、此處から望む上高地の平原も又となく美しいそれから道を喜作新道にとつて槍へ向ふ途中、西岳小屋で休んで居る頃から雨が降り始めた、併し雲が高いので午後二時出發し、險路をよぎ、途中雷鳥の雛を連れたのなどに出會つて慰められながら、三時半に殺生小屋に入る、槍岳の頂上をなす大岩塊が今にも落ちるかのやうに頭上に聳ゐて居る、四時頃から登山客が少しづつ、集つて來て、色々な話がある、次の日が早いので八時過に皆重り合つて癢につく

第六日——一時頃から寒くて眠られない四時前に起出で、淡くなつて行く月影を踏んで頂上に向ふ、附近一帯に大小の岩塊ばかりで、その間に笑ふ高山植物が薄く浮出て居るのみである、二百尺のロツククライムをして、頂に着くと間もなく、黄金色に縁取られて居た雲を破つて、眞赤な太陽が浮上る、そしてその最初の光が天地に満ち

た時、アルペン一帯の山々が紫色に輝いてくる、遠くは富士、駒岳、八ヶ岳、淺間、白山とその偉を競ひ、近くは穂高、焼、乗鞍、御嶽、常念、大天井或は鷲羽、水晶とその大を争つて並んで居る、次第に明さを増してくる平和そのもののやうな飛彈高地も、亦忘れ難い印象の一として眼に映じた暫くして彼等に別れを告げて下り、小屋へ歸つて朝食をとり、六時にいよいよ下山することにする途中雪溪で滑つて、雪で右手をすつと擦りむきなどして、上高地の牧場に入る、白樺の木影に草を喰んで居る馬の數頭が、スキスの自然など想像せしめた平和を表象する川柳が、梓川のほとりに暖かな日の光をあびて立つて居る、焼けた岩石ばかりからでも成るやうな穂高の上には、底の抜けた程寒いやうな青空が被つて居る色々な都合で今踏破することの出来ないこの險山も、亦近いうちに征服しやうなどと考へながら、十一時頃、乾葡萄のみで晝食をすまず、それからすぐ徳本峠を越えて、全く下界の人となる四時半に島口に着き、電車で松本へ向ふ、午後の遅い陽の光が、アルペンの空一杯に春らしい暖さを漲らし

て居た

第四班 金剛山探勝

班員 文一乙 藤木 龍郎

理一甲一 船渡富三郎

第一日(七月十七日)午後十時四十分雨の中を汽車は元山へ向つて京城驛を出た。

第二日 午前六時半元山着。七時半汽船も亦雨の中を長箭へ向つた。途中叢石亭の奇勝を遠望し得た。午後二時半長箭上陸自動車で温井里へ。温泉に旅塵を流し且明日の英氣を養ひて就寢。天氣ばかりが氣にかかる。

第三日 降り續く雨を冒して九時出立。極樂峴を踰へ溪神寺に至る。之より轉石の間を奔流する溪流を左渡右涉し或は木階鐵欄を頼りに一廳臺、仰止臺、金剛門、玉流洞、舞鳳瀑、飛鳳瀑等を経て九龍淵に達する。此の間約二里半。小屋に入り晝食をすまず。上下只だ一枚の斷崖に懸つて九地も碎けるとばかり落ちる九龍瀑の物凄さは折

から降りしる雨に一層凄艶さを益して幽麗且つ神秘的のものである。之より九井峯の樹間に急坂を攀じる三十分で九龍瀑の絶壁の上に出る。瞰下して、藥研の如き溪底に八個の碧潭が珠數と連り神祕崇嚴の一乾坤が形作られて居ると思へば周圍からは稜々たる岩骨の現はした脅威的金剛山獨特の色彩が迫る。二時歸途につく。半雨に濡れつゝ來た路を辿つて五時歸着。

第四日 長安寺から出水の爲自動車不通の報が來た程天候は惡かつた。が併しじつとして居られず十時出立二里程の道を寒霞溪に沿ふて上る。万物相の入口万相亭にサツク等を下して舊新万物相探勝に向ふ。壯哉と叫ばざる得ないと言はれる玉女峯頂の壯觀も殘念ながら接し得ず唯白雲銀霞に包まれて一種の恐怖の感さへ起させられた。午後三時豪雨を冒して長安寺へ七里の道を行くことにする。

途中、雨、疲勞空腹等を忍び且出水の爲幾度か橋の流失にあつて急流に全身を入れて闇を進んだが長安寺の入口の溪流にかゝる向仙橋の流失によつて詮方なく附近の鮮人宅に宿を求めた時に十時半温い飯を焚いて

呉れた親切さと温突の温さは忘れられない
第五日 雨は何處までも我等を苦しめた
今日も雨だつた。長安寺までは行けるといふ事を聞いて濡れた洋服に濡れたサツクを荷うて路とも思へぬ路を溪流に沿ふて上る。約十町辛うじて長安寺内の内地人旅館に入る。之よりは危険ださうなので豫定を變へて終日休む。幸にも夕方には五葉松の背景に輝かしい夕紅を見て消沈した意氣も快復し、長安寺の見物をすました。

第六日 好天氣であるのに元氣づいて九時出發まだ充分減水して居らないので危険な所も數ヶ所あつた。明鏡臺、新羅城趾等を経て靈源庵に達す。僧の漢字を以て案内して呉れたのは有難かつた。庵を後にして來路を戻り折れて望軍臺へ登る。途中水簾洞の大飛瀾を見て鼻つく急阪を或は山藤や木の根に縋り或は辛うじて足がかりを見出して攀ち上るさ兜率庵に出る。之より徑を叢中に求めて上る數丁斷崖の下に達する。設けられた長い鐵鎖を頼りに登りつめると望軍臺の頂點に出る。入山以來の晴天で展望を恣にし得て眞に愉快であつた。下山の途長安寺の諸末寺を訪れて歸宿六時半。

第七日 晴長安寺を出て途中鳴淵潭三佛岩白草庵表訓寺正陽寺を經金剛門を潛つて愈万瀑洞に入る。左右の崖壁は益々欽立し夫れが悉く鐵光色を帶び其の底には八潭が羅列して居る。晝頃摩訶衍に着き、晝食後折から又降り出した雨を冒して白雲臺及金剛水まで行き引返す雨は益降募り、鮮人料理は口に合はず、淋しい一夜を温突に明かした。

第八日 晴天を祈つた甲斐もなく終日雨だつた。行ける所まで行かうとの相談も出たが遂に一日中温突の中で休だ。

第九日 月光に目が覺める。峨々たる金剛山の連脈が黒く描き出されて居る物凄さ案内者を一人つれて最高峯兜廬峯に登る、殆ど道といふ道なく唯溪流の中を木根殿角に身を託して辿り進む。谷深くなるに従ひ山漸く逼り遂には稜々たる花崗岩の急斜面を攀じる。その困難は外には一寸味ひ得ないものであつた。最高點は一六三八米高山としては誇れないが外金剛の削水の如き峰頭を眼下に見下し日本海の淺々たる碧藍は二三里外にある壯觀は之を補ふに充分であつた。恨むらくは後方内金剛の奇峯秀嶺の

白雲に包まれて充分に之を望み得られなかつたことである。幾度か身を岩間溪中に轉せて四仙橋へ下つたのが晝であつたらう。直ちに薑食をすまして出立樹木の鬱茂した内霧在嶺を越えて陰仙臺へ立寄る。新金剛の溪谷が眞下に見ゆ且つ前面には満目皆岩より成る大岩壁に十二枚の白布のかゝれる狀は又さ見られない景色であつた。本路に引返し、途中九龍沼附近で豪雨に遇ひ進んで楡岾寺に入る。金剛山中の第一の巨剎である。三時半なることを聞いて明日の行程を進む、開殘嶺の懸路を下り百川の渡渉に胆を冷し、七里の道を空腹と疲勞とに苦しめられながら九時五十分高城の町へ出た。前後不覺唯飯を食ふて床に入つた。

第十日 曇つて居た。高城から一里足らずの道を浴衣がけて立石里の濱へ出、一舟を賃して海金剛見物、海金剛そのもの、景よりも行きつ戻りつする雲に或は現はれ或は隠れ變幻極りのない金剛山全景の方が遙に見逃し難い雄大なる光景であつた。午後一時自動車にて途中溫井里に寄り長箭に至り汽船にて元山へ万物の奇峯のみは日の暮れるまで我等を送つて呉れた汽船延着の爲

汽車に乗遅れ止むなく元山に一夜を明かす
第十一日 午前十時過ぎ元山發午後五時京城へ歸着雨に始終惱まされながらも豫定の日數で無事遂行し得たことを祝して其の晩解散した。
(藤木)

第四班 霧島方面

班員 柴田鐵一郎 後醍院眞正
(三月十一日より十六日まで)

第一日 夜のあけ方まだ霧の深いころ牧園に下車して廣い街道を東に進む。鶯の聲をきゝながら二里ばかり歩いた頃ふりかへれば今まで歩いて來た丘陵性の土地がはるか後方の眼下にひらけて其の盡きたあたりに櫻島がそびえて居る。行手の山にさへぎられて或は左に或は右 現はれてはかくれる霧島の數峯が近づいて來る頃には街道は九重山の高原の様なだらかな草山の起伏したあたりを走る。種馬場をすぎて道が天然樹の密林の一端を通ることしばし路傍に丸龜の瀧の高札を見つけそれから密林の中を谷に下つて瀧を見る。斜に切り落された柱狀節理の斷崖にほとばしる水の壯觀に二人ともしばらく言葉もなく互に互を忘れて

絶えず動き落ち落ちてはすべつて谷間にはとばしる水を見つめたまゝ勝手なことを考へて居る中に急に寒くなつて又歩む。十一時頃目的地たる琉黄谷温泉に着く。せまい谷間の温泉町にたつた一軒しかない「旅館」の別の一棟に一室をかりて其の正午から自炊にかゝる。自炊にはなれぬことゝは云いながら晝めしの菜には捏ね上げた狸汁の様な一種名狀すべからざるものを創作して其の味をたゞへつゝ食ふ。湯は谷間に面して居る。なめらかな湯の面から立上る湯氣が澄み切つた山の空氣の中に消ゆる度毎に向ひの山の雜木林があげはな窓からよく見える。青い春の空が次第に黒ずんで來て金星と五日頃の月とがかすかな夕焼のただよふ南國の連山の暮れ行く空高く輝く頃一枚十錢の損料で「旅館」から借り受けたせんべい布團三枚にくるまり天井から吊り下げた小田原提灯のうす暗い光の下で旅する身の樂しさを語りつゝ寢に就く。

第二日 思ひもかけぬ雨の音に目をさます此の香氣な温泉宿で今一日自炊生活をするこの樂しさを考へに入れて旅館の人の忠告に従ひ「止むを得ず」韓國登山を延期し

て一日を湯につかつては上り上つては飯菜とを焚いてお互に自炊の上手になつたことをほこりつゝ飯を食ふ。すると日が暮れる他の温泉客は大抵宮崎縣鹿児島縣の田舎の人々であつたが自分達の自炊するのを物珍しげに見やつては或は言葉をかけて行きすぎ或は二人が目から涙を流して燃へつかぬかまどを吹く時等自分達のかまどから燃へついた火のたれをかしってくれる者もある。明日天氣のよからんことをねがふと共に今日の雨に山道の險惡ならんことを思ひうかへつゝ寢につく。

第三日 今日こそはと起き上つて障子をびくれば又も雨。而も昨日にまさる大雨である。此のまゝの雨がつゞけば明日は止むを得ず登山を中止して高千穂と新燃との二山の鞍部(一〇一七米)を越えて高原に出ることに決定する夜には雨が高地とは云ひながら雪に變はつて風がはげしく宿の手摺に干した手拭が固く凍りついた。

第四日 明くれば障子に青空の色のうつろほどの好天氣風は依然としてげしがつたが宿の二階から大隅半島の山々の望まれるほどの晴天に勇み立つて二人ともリユツサ

ツクは宿に置き旅館の人々の風と積雪とを氣遣ふのも耳に入らず急坂をたどる時の暑さに防寒具も宿に残して韓國嶽へと急坂を上る寒さと戦ひ積雪を吹雪に飛ばす暴風に抗して標高一四〇〇米大瀝池のほとりの岩壁に立ち池の彼方に聳ゆる韓國嶽の満山雪におほはれた姿を見とめた頃風は漸く其の強さを増し下駄にも雪としきりに加はる寒氣との爲手と耳と次第に温みを失ふに至つた頃には流石の二人も驚き人跡絶えたる大瀝の池の數丈にわたる岩壁のほとりに佇んでしばし彼方韓國嶽の頂上のあたりに生じては忽ち風にふきおとさるゝ片雲の壯觀をながめて茫然として居た。池のほとりなをたどることさへ危険に思はれる下駄ばきで積雪思ひの外に深い韓國嶽の一千尺を攀づることの暴虎馮河なるを思ひ二人は韓國嶽のふもとより引きかへし再遊を期し新湯をへて下山した。

第五日 昨日のことを旅館の人と及び温泉客の二三に語つて今日の高千穂登山をはかるに、一人も賛成せず殊に旅館の者達は二人に此の風に高千穂の馬の背越の危険なるをくれぐれもつけた。銀色の狐の伏す様な

霜柱の山道をたどつて行く。試に其の霜柱の一本をとれば長さは三四寸にも及ぶものがある。湯之野温泉をへて禁獵區なるせいか所々に雉の飛び立つ雜木の山を登つた時昨日の風のまだおさまらずして二人とも枯草の上に吹き倒されること數度、大林區の境界線らしいものに道をあやまられて岩間の氷柱に渴をいやしつゝ崇高なる高千穂へと高原をいそぐ。阿蘇中岳の噴火口のあたりに見ると、全く同じ色の土から成る、高千穂の頂の銳角に近いとまで思ひ得る傾斜と其の頂より中腹までにかゝる雪とは先づ第一に二人の心をひく。試に新聞紙を取出して折目の一直線なる所に其の左方の傾斜の線をあてがへば、丁度物指を三角定規にあてて見た様になつたり合ひ、以て其の恐しいほどの直線であることを知る無事高原に下り宮崎神宮の別宮たる老杉の姿神々しき社に詣で、汽車にて宮崎へと出發。其の日は大淀の町に一泊。

第六日 宮崎神宮參拜。青島見物。青島は勿論天下の奇勝。ではあるが自分達の心をひいたのは青島の小規模なる熱帯樹林ではなくて、それよりむしろ大淀から青島まで

の南國の景色であつた。何里にわたるかと思はれるほどの松原が人家もない廣い田園の彼方に五分程の高さに海岸を走つて居る松原と松原との間をつなぐものは明るい色をした砂丘の低い連續である空には一點の雲もない。空の紺碧が反射して、而もそれ以上に青い恰もブルシヤンブルーの繪具なチューブから出してそのまゝぬりつけた様な水平線は、見わたす限りの弧を描き遠く砂丘との間には、時々音は聞けないが白波が高く立上つてはくづれ落ちる。汽車は一面桃色を白にとかした様なレンダサウの畑を走る。其の夜、夜行で熊本へと歸る。

(以上春期休暇) (柴田)

○祖母攀登、五月三日より

此行申込者二十名を越へたるも當時雨天なりしため参加者僅に二人。五ヶ所小學校まで行きて引きかへす。遺憾なりき。

○八方岳登山 五月二十八日

参加者 文三甲一 柴田鐵一郎

文三乙 田代 東洋

立町乗車——隈府下車——中野瀬——

櫻原——上虎口——頂上

サイダー一本。ビスケット二斤持つて登る

亂雲低く飛んで左方遠く鞍岳の頂をかすめて、尙ほるかに九重の姿をかくす。眺望よくきく。ふもとはつゞじの満開なりき。

○三岳登山 六月一日

参加者 文三甲一 柴田

文三乙 石井 星子

理三甲一 藤村 石田

文二甲一 本田

文二 吉村

理二甲三 本多

文一甲一 富田

本妙寺 小萩山——東門寺 出羽

頂上——植木驛

盛會なりし上雨降りて一段の趣を添ふ。出羽附近にて一時道を誤る。頂上にて雨を無視して岩頭より有明海岸をのぞめば小天附近の大理立地宛然日本畫の如し。

以上一學期

編者のつづき

委員 田代 四郎

▲今度の原稿の様に汚い原稿は始めてだ。誤字、脱字、略字、句讀不明瞭、……。

ミスプリントかと思つて原稿と校正刷を見較べると、原稿の方が間違つてゐる。でも一旦掲載する事に決した分の原稿は一字たりとも委員の勝手にはならぬ。作者の「ために」そのまゝにして置いた。自分では之でよいと思ひ乍ら書きつ放しにして置くとこんなものだ。二三度位讀み返して見なくちゃ……。

▲從來一頁十九行だつたのを、今回に限り二十行にした。豫算を超過するからだ。それでも御覽の通り百二十五頁だからなあ。

▲感冒で頭が痛い。妄言多謝。

